

KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第 88 号 平成 30 年 3 月 20 日
編集・発行 神戸市立中央図書館
〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



みどり号（新車両）

イラストは「ワケトン」の作者
the rocket gold star こと
山崎秀昭氏によるもの



五代目 みどり号

平成二十九年四月から新車両になった自動車図書館が、誕生からまもなく一年を迎えようとしています。

自動車図書館は、本を載せて図書館が近くにない地域を巡回します。神戸市で初めて導入されたのは、昭和四十七年十月のことでした。みどり号と命名された車は、およそ八百冊の本を積むことができました。

それから四十年あまり、車は世代交代を重ね、積載冊数は約三千冊まで増えました。その他にも、雨よけテントの搭載や親しみやすいイラストを取り入れるなど、さまざまな変化がありました。みどり号という名前と、クリーム色と濃い緑色の二色の配色は初代から変わらず受け継がれています。

代替わりに伴い、平成十四年から活躍した四代目みどり号は、一般社団法人日本外交協会を通じて南アフリカ共和国に寄贈され、子ども達に本を届けることになりました。

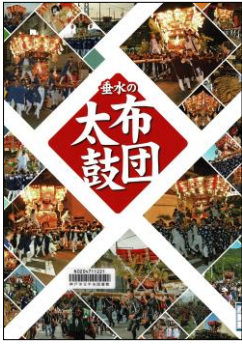
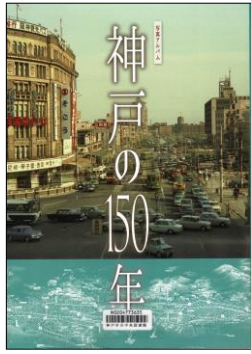
すべての人に本を、という想いを一つに、二台のみどり号はこれからそれぞれの国で役目を果たします。

参考：『神戸市立図書館100年史』

神戸の150年—写真アルバム (樹林舎)

開港から平成まで、港町神戸の在りし日を写真六百点で振り返る。添えられた解説からは、それらの歴史を詳しく知ることができる。

戦後以降の昭和の姿が印象深い。焼け跡から力強く復興していく元町や新開地の市街地。三十年代の高度成長期を迎えると、新時代を感じさせる神戸市役所(現在地)やポートタワーの建設、さらに人工島、ニュータウンの開発が進む。レジャー、イベント、学校行事などで埋め尽くされた風景写真や明るい表情が写る日常のスナップには、懐かしさと活気がある。



垂水の布団太鼓 垂水郷土芸能保存 会編集・発行

布団太鼓は、屋台の上に布団を重ねた形状が特徴的な飾り山車だしの一種である。主に西日本の祭りで使われている。現在、垂水区では海神社と舞子六神社の氏子地で合わせて五台の布団太鼓が巡行し、祭りを盛り上げている。

本冊子では、各地域に伝わる布団太鼓の歴史と変遷を、数多くの写真とともに紹介している。外観だけでは分かりづらい布団太鼓の構造図・名称も、図解と写真付きで解説されていて興味深い。

ぐるっと探検★産業遺産 前畑温子 (神戸新聞総合出版センター)

兵庫県を中心とした関西の産業遺産三十一か所を行きやすさのレベルに応じて紹介。

市内では、ポートタワーから廃墟となった摩耶観光ホテルまで、豊富なカラー写真とコメントで見所を取り上げている。普段、立ち入ることができない場所から撮影された写真で探検気分が味わえる。巻末の持ち物リストを見れば場所に応じた準備ができ、初めて産業遺産を体験する人にもおすすめ。

伝説のコレクター 池長孟の蒐集家魂 大山勝男 (アテネ出版社)

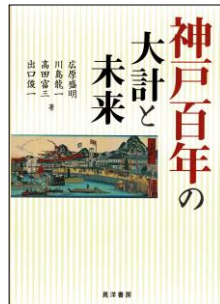
神戸の資産家池長孟はしろうは南蛮美術の蒐集しゅうしゅうに資産を投じ、戦前、神戸に私設の「池長美術館」を開設した。戦後、全コレクションを市に寄贈、現在神戸市立博物館に受け継がれている。

教科書でも有名な「聖フランシスコ・ザヴィエル像」を購入するために別荘を売却した逸話や植物学者牧野富太郎への経済的援助、作家谷崎潤一郎との交流など、エピソードは多岐にわたる。氏のスケールの大きさが見てとれる。

ひょうごの自然フィールドガイド 身近な生きものたち 兵庫県生物学会編 (神戸新聞総合出版センター)

普段、近所の散歩や山歩きに出かけた時など、名前を知らない鳥や虫、花や樹を見かけて気になっってしまうことはないだろうか。

本書は、県内で身近に見られる生きものや植物が、まち、里山、海岸といったフィールドごとに分類され、実際に目にした動植物の名前と生態がすぐに調べられるようになっている。持ち歩きやすいサイズだが、掲載種は豊富だ。



神戸百年の大計と未来 広原盛明ほか (晃洋書房)

神戸開港一五〇年を節目に神戸の都市政策を考える。

第一部では、現在、市が直面する三大プロジェクト、神戸医療産業都市構想、神戸空港、新長田南再開発の現状と課題を分析する。第二部では、誕生以来、高度成長を続けてきた「輝ける都市・神戸」の都市政策を歴史的に解明し、さらに、論点は人口縮小時代に適応した計画コンセプトに及ぶ。「拡大成長時代」が終わりを告げ、転換期にある神戸市。これからの百年、どのように都市を再生し、新しい街をつくっていくかが提起される。

友情―平尾誠二と山中伸弥「最後の一年」 山中伸弥 平尾誠二 平尾恵子 (講談社)

ラグビーで神戸製鋼を日本選手権七連覇に導き、日本代表監督を務めた平尾誠二とiPS細胞の研究でノーベル生理学医学賞を受賞した山中伸弥との間に育まれた友情の記録。平成二十二年、雑誌の対談をきっかけに二人は打ち解け急速に距離を縮めるが、その六年後、平尾氏は帰らぬ人となった。

第一章は山中氏が、第二章は平尾氏の妻恵子さんが、出会いや皆で立ち向かった闘病生活を回想する。第三章は、出会いの場となった対談が掲載され、両氏の交わした熱い言葉が甦る。



コーベッコー スズキコージ (BL 出版)

神戸港の朝日に向かって風見鶏がコーベッコーと時を告げてお話しは始まる。クロメガネのおじさんが望遠鏡で見たのは金星、明治七年の金星観測だ。他に鉄道開通や生田の競馬場など、場面は明治の開港からの出来事と現代の間を自由に行き来する。あふれる色彩、のびのびと勢いのある筆さばきで賑やかに神戸を描いた絵本。

六年前に神戸に移住してきた著者が、一五〇年の歴史と、感じ取った魅力をギュッと詰め込んだ。

いのちの旅人―評伝・灰谷健次郎 新海均 (河出書房新社)

今なお、多くの人々に読まれていく『鬼の目』や『太陽の子』。灰谷健次郎の作品には、さまざまな環境に生きるすべての子供たちに注がれる温かなまなざしがある。神戸で生まれ育った灰谷は、兄の自殺や己の未熟さなどから小学校教師を辞め旅に出る。たくさんの人との出会いを通して、いのちについて考え、身を削るような作品を書き、信念のもとに行動した。灰谷健次郎の初の評伝。

II その他の新刊 II

六甲山記念碑台パースアイマップ 2017 「青山大介」 多聞のあゆみ 多聞史誌編集委員会 編集・発行

訂正 第87号掲載の『小林一三は宝塚少女歌劇にどのような夢を託したのか』(ミネルヴァ書房)の著者名が誤っていました。正しくは、「伊井春樹」です。謹んでお詫び申し上げます。

神戸 その12 あんな人こんな人

G・デラランデ Georg de Lalande 明治5年(1872) ~ 大正3年(1914)

国指定重要文化財である「風見鶏の館」はドイツ人貿易商ゴットフリート・トーマス氏の自邸として明治37~38年(1904~1905)頃に建てられました。

その設計をしたのがゲオログ・デラランデです。彼は明治5年(1872)現ポーランドのヒルシュベルクで生まれました。ベルリンの高等工業学校建築科を卒業後、上海や天津を経て、明治36年(1903)に来日。当初は横浜を本拠にしていましたが、その後東京に事務所を移し、神戸・名古屋・京都・大阪に支所や出張所を設けて活動します。在留外国人の邸宅だけでなく、日本の銀行や商社、個人の邸宅なども手掛けました。

神戸では明治40年(1907)に外国人居留地のオリエンタルホテルを、翌41年(1908)に現在の東灘区西岡本に建てられたヘルマン邸を設計しています。

今も「風見鶏の館」は煉瓦の外壁が他の異人館とは異なる重厚な雰囲気醸し出して、尖塔の上の風見鶏は神戸の異人館の象徴となっています。

参考：『外国人居留地と神戸』田井玲子(神戸新聞総合出版センター2013) 『外国建築家の系譜(日本の美術No.447)』堀勇良(至文堂2003)他



風見鶏の館

神田 孝平 かんた・たかひら

廃藩置県から四か月後の明治四年十一月、現在の兵庫県域に兵庫・飾磨・豊岡・名東(淡路) 四つの新しい県が誕生します。日と同じくして、神田孝平は兵庫県の県令(知事)に任命されます。居留地を抱える兵庫県には外国事情に精通する人材が必要と考えられ、蘭学者であり、博識多才な神田が抜擢されたのです。着任後、まず県庁内の組織を整えます。そして、河川や道路の改修、防波堤建設を計画し、都市基盤の整備をします。また病院の建設や県庁舎の改築などの都市施設の整備にも着手します。五年の任期にわたり、神田は新しい兵庫県建設のため大事業に次々と取り組み、近代的県行政の確立に力を尽くしました。外国の地方自治などの政治制度をよく知る神田は、県民が県政の方向性を決め、官吏は行政の実務者として手腕を発揮すべきだと考えていました。そこで明治六年、「民会議事方法撮要」「町村会議事心得」等を各町村に到達し、民選による会議を

開催していく方針を示しました。当時、中央政界において地方行政の構想を立ち上げた木戸孝允ですら、この時点では、政治体制の西欧化は時期尚早と考えていました。このことから全国に先駆けて「公選民会」を開催しようとした神田に、先見の明があったことがわかります。



神田孝平 福澤諭吉『神田孝平集』より

「公選民会」を開催しようとした神田に、先見の明があったことがわかります。

教育についても熱心で、洋学を奨励し、神戸兵右衛門らが設立した学校「明親館」に日・英・蘭語に通じた外国人教師を雇用し、明治五年には、県立洋学校と合併して兵庫町会所に移し洋学教育を始めました。また、自ら顕微鏡を持って学校を巡回し教員や生徒に指導したともいわれています。

さらに、神戸には英字新聞しか発行されていないことを憂い、明治五年から「神戸港新聞」を発行させています。

また、明治五年に米国産のジャガイモの種子数個を持ち込み、栽培を普及させようとしています。この取り組みは、すぐには成果が生まれませんでした。明治十六年以降の凶作を

機に、広まりを見せます。

明治六年には、神戸港の初代港長 J・マーシャルが提出した築港計画案を受けて港灣改築に乗り出しますが、大蔵省から承認がおりず、この時は実現しませんでした。「元町」の名付け親ともいわれ、これは、明治七年に、神田が町名を「元町通」と改称する布達を出したことにあります。

神田は、湊川以西の整備に伴う河川や道路の改修など、自ら土木工事の設計をして成果をあげています。天文学にも精通していたよう、明治七年に行われたフランス隊の金星観測にも関心を示し、その記念碑を建立するため設置場所を官有地として買い上げるよう指示しました。諏訪山にある「金星観測記念碑」には、正面の一番上に金星が太陽面をどのように通過したかが刻まれています。また、背面には、「明治七年十二月九日 兵庫県令 神田孝平在任」の文字が読み取れます。

神田は、湊川以西の整備に伴う河川や道路の改修など、自ら土木工事の設計をして成果をあげています。天文学にも精通していたよう、明治七年に行われたフランス隊の金星観測にも関心を示し、その記念碑を建立するため設置場所を官有地として買い上げるよう指示しました。

諏訪山にある「金星観測記念碑」には、正面の一番上に金星が太陽面をどのように通過したかが刻まれています。また、背面には、「明治七年十二月九日 兵庫県令 神田孝平在任」の文字が読み取れます。

神田は、幕末、幕府の教育機関開成所(のちの東京大学)の頭取を務めていたことから、明治政府の官人として出発し、生涯を送ります。一方、学者としては、明治十二年に東京学士会院会員となり、のちに副会長を務めます。数学の分野では『数学教授本』を著し、経済学の分野でも『経済小学』を翻訳するなど優れた業績を残しています。

また、明治十九年には『日本太古石器考』を執筆するなど、考古学の分野でもその才能は発揮されています。実際、神田は、東京人類学会の初代会長に就任し、その雑誌にも多数の論文を寄せています。日本における考古学の黎明期において、官人としての立場も持つ、神田が会長職にいたことでの学会に対する支えは大きなものであったと推測されます。秀でた学識と行政手腕を各方面で発揮した神田によって、初期の兵庫県政時にまかれた種は、後にさまざまなる形となって大きく実を結んでいきます。

参考文献

『福澤諭吉・神田孝平集』『外国人居留地と神戸』『神戸開港三十年史』『神田孝平研究と史料』『郷土百人の先覚者』他



諏訪山公園内の「金星観測記念碑」